

第 50 回語学ゼミナールに参加して (S. Yokota) [J]

2024 年 8 月 26 日から 8 月 29 日の 4 日間に亘り、第 50 回語学ゼミナールが開催されました。今回は日本大学理工学部駿河台校舎を会場に、Holger Diessel 先生（イェーナ大学）を講師としてお招きし、*Sprachtypologie in der gebrauchsbasierten Linguistik* という総合テーマの下、講演を行っていただきました。簡単にではありますが、今回の語学ゼミナールについて報告させていただきます。

招待講師の Diessel 先生の講演は 1 日目の午後、2 日目・3 日目の午前に行われ、総合テーマに関してそれぞれ異なる言語現象を取り上げて説明いただきました。1 日目の講演ではダイクシス表現について、さまざまな言語の例と共に見ていきました。英語の *this* や *that*、および日本語のいわゆる「こそあど言葉」のように、言語によってダイクシス表現の表す範囲に幅があることは知っていましたが、そこから言語獲得や言語変化の話にまで繋がるとは思っていなかったため、驚くとともに強く好奇心がそそられました。

2 日目には語順が取り上げられました。言語類型論では避けては通れないテーマである語順について、三つの異なる立場の見解が参照され、Diessel 先生が立脚する *gebrauchsbasierte Linguistik* について教授いただきました。

3 日目には副文について知見を深めました。副文が前置されるか後置されるかで機能的、形態統語的に明確に異なるのだということを全く知らなかったため、とても勉強になりました。

Diessel 先生の発表全体を通し、「使用に基づく (*gebrauchsbasiert*)」という考え方は、AI の言語処理にも通ずるものがあり、とても面白く思いながら講演を聴かせていただきました。

今回は記念すべき第 50 回目の語学ゼミナールということで、1 日目の開会の挨拶の際、実行委員長である宮下博幸先生（関西学院大学）が過去の語学ゼミナールのテーマと招待講師の先生方についてスライドと共に振り返っていただきました。普段、先生方とお話していると「～年の語学ゼミナールに〇〇先生が来たときに」という話題になることがあるためわかっていたつもりでしたが、歴代の招待講師の先生方の錚々たる顔ぶれに驚きが隠せませんでした。

2 日目と 3 日目の午後には、先生方・先輩方による発表が行われました。今年の総合テーマは言語類型論であったため、例年以上にさまざまな分野を専門とする方々が発表されており、いずれも非常に興味を惹かれる内容でした。私自身も 3 日目に発表の機会をいただき、皆様からたくさんコメントを頂戴しました。研究発表という点に関しては Patrick Kühnel 先生（北京大学）の発表が、ドイツ語の拙い私でも置いていかれずに追えるようなわかりやすいもので、人前で話すというのはこういうことかと目から鱗が落ちました。

3 日目の夜には懇親会が開かれ、参加者の皆様とさまざまな話をすることができました。先生方・先輩方はもちろん、韓国の大学の学生や専門分野の異なる学生とも研究について語り合うことができ、たいへん楽しい場でした。私は丁度発表の後だったこともあり、すっ

かり気が抜けかけていましたが、周りの参加者の皆さんがドイツ語で盛んに自身の研究について語り合う様子を見て身が引き締まる思いがしました。

今までドイツ語を使って発表する機会を持つことがほとんど無かったため、語学ゼミナールは私にとって非常に貴重な場でした。実行委員の皆様には発表準備から懇親会まで、微に入り細に亘りご助力いただき感謝申し上げます。また、Diessel先生をはじめ、先生方、先輩方にも、この場をお借りしてお礼申し上げます。

横田詩織（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

0203

作成日 : 2024/11/05